

個性と共同性が育つ学習グループ活動

— 相互のコミュニケーションが基本

はぎわら もとあき
萩原 元昭

川崎市の市民館の婦人学級を通じて出会った、いわば学縁と言われる仲間たちが、月1回の読書活動を始めてから21年になる。筆者も支援者としてかかわってきたが、年1冊の目標で各自が推薦して取り上げた書物も21冊以上に及んでいる。15人~20人の小グループの活動が20年以上継続してきた要因としては、次のような3つの視点があげられる。

第1に、学習活動を支援するファシリテーター、幹事、メンバーの関係は、個々人の心理的要求を尊重し満たし合えるよう、そして各自の自立に結びつく援助を相互に調整するよう心がけ、上下関係が明示的にならないような雰囲気醸成されたことである。特に幹事の1年ごとのローテーションによる交代は、メンバーの連帯意識の形成に有効であった。第2に、幹事や発表・提案者の役割、およびテキストの選択などは自己申告を原則として全員が参画し、各自納得のいくまで話し合って結果を出すというコミュニケーションの過程を重視したこと。年齢や立場などによる序列や順番などより、メンバー一人ひとりの意思による選択を最重視してきた。第3は、学習活動で得た情報を何らかの地域の実践活動に生かし、自ら参画することに結び付けていることである。例えば『子どもの生活圏』(1969, NHKブックス)を読んだ後に、子どもの遊び場として可能な土地の実態調査をし、それを基に地図化した提案を作成して市の計画の検討を申し入れたり、子どもたちが花つみを楽しめるよう空地にレンゲ草の種をまく運動を行うなど、地域に密着したさまざまな取組として展開している。一方ヘルシンキ大学環境専門セミナーのフィールドワークに参加するなど、地球環境保全や世界の平和、男女共同参画社会を目指す、マクロな視点をも所有し、メンバーの学習活動の関心は「私」から「私たち」へ、そして地域市民から地球市民へと広げてきている。

Think globally, act locally をモットーとした魅力ある充実した学習活動をめざすためには、メンバーに個性と共同性が育つ相互の学習支援の方法と参画型実践が問われることになるだろう。

■プロフィール 1932年群馬県生まれ。群馬大学教授、江戸川大学環境情報学科長を経て東京福祉大学教授(特任)。専門は、女性・幼児・青少年の社会学。編訳『教育伝達の社会学』や『幼児教育の社会学』『個性の社会学』『幼児の保育と教育』などの編著がある。